

## 佐賀県国際交流協会 30周年記念インタビュー

スペースの関係上紙面でご紹介できなかった全文を、ご紹介します。



### ラタナーヤカ・ピヤダーサ 氏

スリランカ出身、経済学博士  
佐賀大学名誉教授

#### Q1. 佐賀(日本)に来たきっかけを教えてください。

A.

私はスリランカの大学を卒業後、大学教員や公務員等を勤めた後の1982年に、日本の農業発展の経験を学び知見を得るために来日しました。大阪外国語大学で日本語を学び、東京大学と龍谷大学で大学院修士・博士課程を修了して、1989年から2017年まで佐賀大学経済学部の教員として勤めました。

日本の大学院を研究活動拠点として選択したきっかけは、大学入学判定試験において「日本文化」を選択したことと日本でしか学べないことがあると思ったこと、特に日本の「人的資源育成」のあり方に強い関心があったことでした。特に日本人は、人が亡くなっても「一生忘れない」という大事な文化を持っていることは、強い印象として残りました。日本が第二次世界大戦後、短期間で戦後の焼け野原から世界第2位の経済大国になるまで、どのように成長してきたのかについて学ぶチャンスを得られることも非常に大きな選択におけるファクターとなりました。上記から、日本でしか学べないことがあると思ったので、もし留学できる機会があるならば日本を選択したいと思いました。

#### Q2. 来たばかりの頃、佐賀の様子はどうでしたか？

A.

1982年に大阪に着いた時に経験した未だに忘れられない思い出として残っているのは「日本人のおもてなしや非常に丁寧な歓迎の方法」についてです。逆に一番困ったのは「日本語」です。そう思うのは当時、私は大学院における研究活動は英語でできると思っていたからです。当時、東京大学においても全ての教育及び研究活動は日本語のみで実施されていたので日本語をマスターするか、帰国するかのも二択だったので、真剣に悩みました。しかし当時東京大学の指導教員をはじめ多くの日本人の方々から温かい協力を受けて日本語を学ぶことができ、他の日本人の大学院生と同じように日本語で専門分野を学ぶことができました。

た。京都および宇治市の国際交流活動に参加する機会があったので時間が許す範囲で日本の祭りや文化などについても学ぶことができました。

1989年に京都から佐賀に移住する前に日本人の多くの友人から佐賀移住について「佐賀の人は外部の人、特に外国人を受け入れない」、「何もない町」、「非常に閉鎖的」などの消極的なことばかり言われました。しかし、実際に佐賀に移住して初めての印象は私の母国の実家に帰省したときと同じように感じました。そう感じたのもスリランカにある私の実家とほぼ同じで、緑が多く、人と車が少なく、田んぼが多い環境だったからです。逆に一番困ったことは、「アパートを探すこと」でした。もう一つ困ったことと言えば、困ったというよりも面白く感じたことですが、それは私と家族が街中あるいはスーパー等へ出かけた時に、日本の方々がまるで今まで見たこともないようなものを見るような眼差しで私達を見ていたことでした。当時の佐賀県内において外国人は非常に少なかったことが主な原因だと理解しております。

佐賀大学経済学部で初めてアジアのことを教壇で学生に教えるようになった私の役割として心の中で誰にも言えなかった一番重要な課題としてあったのは、「教育の国際化」と「地域社会の国際化」でした。なぜそのような課題を持っていたのか、その理由はこの課題を持つことで、結果的に豊かな日本及びアジア全体の平和的かつ更なる経済社会発展の基盤になると思ったからです。日本とアジアの経済関係、特に日系企業の投資活動及びアジアとの輸出入関係を見ても徐々に欧州からアジアへと重点がシフトしております。将来日本経済が「安定かつ強い経済」を持つ国として発展する為に、「大学教育及び大学研究の国際化」を中心としたグローバル人材育成の実施が急務になっております。しかしアジア各国において日本の言葉、文化、習慣や、経済活動等をよく熟知している人材がアジア諸国のどんな小さな国にもいるのに、逆に日本国内においてアジア各国の言語や各国の状況を理解・熟知できる人的資源が非常に少ないです。

様々な言語、文化、習慣や、肌の色で多様化されている世界中の人々と平和的かつ友好関係を築き上げるのに一番重要なものとして「相互理解」を中心とした国際交流の発展だと思っております。この目的達成のため私は学部学生に対しアジア経済発展に関する様々な学問分野を理論的に学ばせた後、実証的に理解させるために「短期海外研修」と「長期海外留学」に参加させる取り組みを毎年実施してきました。佐賀大学と学術協定を結んでいるアジア諸国及び欧米の大学の協力のもとで、各国を訪問しながら、その国の経済及び社会問題について実証的な形で経験させる取り組みを行ってきました。このような形で学生達が大学の講義を通じて学んだことを更に深く理解する際に非常に大きな効果が出ました。

経済学部の学生の海外留学実績（長期・短期）見みると約400人の日本人学生がアジア諸国及び欧米諸国に留学していきました。その中で、数十人が世界的に最も有名な大学（イギリス・グラスゴー大学、オーストラリア・モナッシュ大学、ニューイングランド大学、ニュージーランド・オークランド大学、中国人民大学など）の大学院に入学し、その留学経験を元に現在では日本あるいは国際社会において大きな貢献をしていることは間違いのないと思います。

それと同時に地域社会の国際化のために、私は佐賀県内における様々な活動に積極的に参加しながら「国際化の重要性」について強くアピールしてきました。特に地域の民間団体や学校等でアジア諸国と日本の関係や、グローバル化の必要性、国際化の意味などについて40回以上の講演会を実施してきました。更に毎年日本とアジア諸国が現在直面している主な経済的・社会的問題について海外協定大学の教員

らと共同研究を実施し、研究成果を発表するために佐賀大学で国際シンポジウムを実施しました。

このシンポジウムの発表は、経済学部だけでなく佐賀大学に所属する多くの教員・社会人・大学院生らの参加のもとで実施しました。それと同時に地域社会の国際化のために、「社会人の国際交流実習」というプログラムも実施しました。これは大学で毎年実施している「みんなの大学」から約20人の社会人がアジア協定大学の協力のもとで、アジアの国々を訪問しながら同諸国の現状について実証的に経験してもらう取り組みを始めました。

### Q3. 近年の佐賀はどうですか？

A.

最近私にとって佐賀は私の故郷になっていることです。近所の方々が親戚のように私を受け入れて頂き、私や私の家族に何か問題が発生しても必ず助けてくれます。地域の方々は私を他の日本人と同様に受け入れてくれています。今現在、佐賀県のどんな小さな市町村に行っても誰も私のこと特別な目で見ることはありません。そこで感じたのは、佐賀の皆さんは多様な文化をもつ外国人とともに生きることに慣れてきており抵抗感を持たなくなってきた点です。たとえ日本語が余りできなくても佐賀でしたら地域住民と一緒に安定で安心した楽しい生活ができる環境が構築されていると感じております。例えば今現在、佐賀大学で学んでいる数百人の留学生の様々な経済的・社会的問題は全て地域の住民の協力で解決しているのは事実です。具体例を挙げれば住居に困る留学生向けに地域住民の前山さんが留学生のために特別な寮まで建設しました。

その結果、留学生の多くは卒業後、大変良い思い出をえることができ、また佐賀に来たい、いつか自分の子供が佐賀に留学して学んで欲しいと考えております。地域住民と帰国した留学生との関係は永遠にと思えるほど長い間、この良好な関係を継続しております。私にとって一生忘れられない一言があります。それは佐賀県医療センター好生館で入院して出産を経験した留学生が帰国前に言ったことです。『私にとって病院のお医者さんはじめ看護師さんたちは「神様と変わらない」です。薬よりも皆さんからの温かい話や、親切な扱いは世界中どこを探しても決して見つけることはできません』です。30年前と比べて、現在佐賀は外国人にとって非常に住みやすく安心安全な地域であることは間違いありません。

### Q4. これからどんな佐賀になってほしいと思いますか？

A.

佐賀に伝わる伝統的な文化、習慣、お祭り、環境、宗教、経済、社会などに悪影響が無い形で世界に開かれた地域になって欲しい。それによって佐賀の経済、特に農業と伝統的な地域産業等の更なる発展に貢献してもらえば理に合うと思っております。SPIRAはその目的を達成するための重要な役割を果たす機関となっているのは間違いありません。将来、外国人と佐賀の地域住民との関係を結び国際交流に関する事であれば何でも相談が可能なセンターになることを強く期待しています。